

就活過程での性格検査の使用実態は心理学的に妥当なのか

——文献研究と就活生へのインタビューによる「就活的望ましさ」の検討——

C120037 藤本 美香

本研究では、就活において性格検査が多用される背景とその妥当性、心理学部生が感じる実態と学びとのギャップを明らかにするため、文献と面接法による研究を行った。研究の結果、多用される背景として新卒文化が有する職務スキルではなく人柄重視であることが大きな要因であった。また、妥当性については、用いられている尺度や回答方法では、作為回答の検出は可能であるがそれと同時に神経症の低さや調和性などの何らかの性格の一部を測定している可能性があることが明らかとなった。加えて、妥当性が認められていないものも存在した。そして、実態としてインフォームド・コンセントが実施されていない等の心理学が提唱する倫理規定や配慮に大きく反する実態があり、さらに心理学部の就活生は「就活的望ましさ」と呼びうる学部での学びとのズレを感じ葛藤や悩みを経験していた。以上のことから、就活場面での性格検査の使用実態は妥当であるとはいえず、さまざまな課題が存在すると考えられる。

ボランティア活動経験による援助成果

——学生を対象として——

C120104 横山 未来

本研究の目的は、学生がボランティア活動経験によって得られる「援助成果」を検討し、学生ボランティアに必要な心理的支援について考察することであった。研究 1 では、学生 380 名を対象に、ボランティア活動経験の有無による援助成果に対する評価の差を検討した。援助成果に関する項目の因子分析では、「肯定的感情の経験」「自己成長」「向上心の芽生え」の 3 つの因子が抽出された。3 因子において、活動経験者の得点が有意に高く、援助成果を高く評価していることが示された。研究 2 では、大学生 10 名を対象に、ボランティア活動前後の援助成果の変化と活動中の悩みを検討した。援助成果の認識は活動前から高く、最も高かったのは「自己成長」で、活動後の評価も高くなることがわかった。また、活動前の不安や「被支援者への対応の難しさ」の悩みに対してのサポートの必要性が示唆された。